

Amit Bhaduri,

*The Face You Were Afraid to See: Essays on the Indian Economy.*

New Delhi: Penguin Books, 2009, vii+194pp.

きとう はじめ  
佐藤 創

本書のタイトルを直訳すれば「誰もがあえて見ようとしなかった顔」であろうか。この表題はカエサルがよく知られた名言を想起させる——「多くの人は見たいと欲する現実しか見ない」——。本書はインド経済の発展メカニズムを様々な側面から検討し、近年の高い経済成長率の陰で無視されがちなその問題点を考察している。

このような本書を世に問うた著者はケンブリッジを中心に形成されたポストケインジアン系の系譜にある、インド出身の高名な経済学者である。一般読者向けの本もいくつか刊行しており、インドの経済自由化に関する *The Intelligent Person's Guide to Liberalization* (New Delhi: Penguin, 1996. D. Nayyar との共著) はとみに広く読まれている。

本書も、著者がインドの政治経済について折にふれて発表してきた近年の論文のうち、学術的にあまりテクニカルでないものを集めたものである。また、随所に文学や哲学からの引用もあり、読者の興味を引き離さないよう工夫もされている。ただし、別々に発表された論文のコレクションであるため、同じ主張の繰り返しが目立つという欠点は免れていない。

それでは、その著者の主張とはどのようなものか。その要点は、インドの良好な経済成長率は、成長が社会的な格差を拡大し、拡大した不平等が成長を促進するというパターンに支えられているため、高い経済成長率の果実がトリクルダウンして貧困層もいずれそれを享受できるという支配的な議論は幻想であり、一部の利益を代表するものでしかないということにある。いいかえると、「開発」、「産業化」、「グローバリゼーション」という名のもとにインドで生じていることは、とりわけ農村の貧困層に負担を強いて大企業や金融部門に利するタイプの経済成

長であると主張している。

その証左として、経済成長率が高いものの雇用は伸びておらず、政府支出における教育や医療など社会福祉関連の予算が減少して、所得格差が拡大していることに注意を喚起する。(1)貿易自由化により国際競争力の向上が重要とされ、労働コストの相対的なないし絶対的な削減を意味する労働生産性の上昇が目指され、雇用や賃金の増加は抑制される、(2)インドの外貨準備が潤沢になった理由は貿易黒字ではなく金融自由化に依拠しており、外資が逃げ出さないよう財政規律や減税、労働市場のフレキシビリティ向上などの政策が指向される、(3)私企業主導の産業化を支えるため、天然資源の開発や経済特区建設のための大規模な土地取用を、政府は貧困層やマイノリティを抑圧しつつすすめている。

その上で、どの政党も、経済運営については市場の役割を重視する自由化や民営化、私企業主導の産業化、グローバリゼーションの方向しかないと考える TINA (there is no alternative) シンドロームに陥っていると批判する。さらに、労働コスト削減など個(一企業)としては適切であろう方針を全体(一国経済)に適用することの誤り、ケインズのいう合成の誤謬もおかしていると指摘する。

それでは、著者が考える代替的な経済発展とはどのようなものか。第1に、海外需要(輸出)ではなく、国内、とりわけ貧困層の購買力向上とそれによる内需拡大を重視し、第2に、農村での雇用創出を促すため、より分権的な政策決定機構を整え、第3に、GDP 成長率を雇用の成長の結果として捉えることであり、財政赤字も辞さずに雇用を生み、とくに貧困層の雇用増加による内需拡大に基礎をおく健全な経済発展を目指すべきと主張する。

このようにグローバリゼーションに異を唱え、国内の有効需要を重視する著者の主張には賛否両論あるだろう。少なくとも、本書の考察は結果的にインドという文脈を超えて、経済活動全般において深化しつつあるグローバリゼーションそのものに及び、表題にあるとおり、多くの人が「あえて見ようとしなない」その諸相に光をあてるものとなっている。その意味で、本書は、インド経済はもちろん開発一般に関心があれば、一読に値すると思われる。

(アジア経済研究所在ロンドン海外調査員)